

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2007年秋 第5号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

第2の故郷 インドネシア 雑感

藤原 剛 (’41卒 専18)



学徒動員に先立つこと3年、昭和16年(1941年)12月末、大阪外語の馬來語(インドネシア語)部を繰り上げ卒業した私は翌17年2月、郷里・山口の陸軍歩兵連隊留守隊に入営。予備士官学校を出て、マレー・シンガポール作戦後にアラフラ海・ケイ諸島(現インドネシア領)で敗戦まで駐留しました。復員後、毎日新聞記者としても5年近くジャカルタに駐在。やがて定年を迎えました。つまり、人生の半分はインドネシアに関係したと言ってよく、インドネシアは第2の故郷でもあります。

更なる発展を

長い大阪外語の歴史のなかで、予想もしなかった大阪大学との統合が実現しました。歴史とは人類が成長していくなかで絶えず移り変わり、発展していくものだとは私は考えます。ギリシャ、エジプト、ローマ、中国も全て歴史のなかで、発展しました。日本も例外ではありません。

母校は阪大外国語学部で発展します。願わくば「外国語が読める、話せる」の姿勢でなく、語学を通じて、相互の正しい文化を理解しあうよう。そして秩序ある、真の平和と共存の追求を願って止みません。

南方に憧れて

外語に入学したのは昭和14年。父がフィリピンで、日本の商社と古い沈没船の売買をしていました。また、蘭領東インドの石油資源獲得をめぐる、日本の南進論が盛んでした。そんな環境から、旧制・山口県立柳井中学時代から南方に憧れ、親の

望んでいた旧制高校受験をやめて、大連、小樽高商、大阪外語に合格、第1志望の外語へ進みました。

そのころ、インドネシア語を馬來語と呼び、スマトラ・メダンあたりの言葉を蘭語つづり(例えば、uをoeと書く)で教えていたので、人口の最も多い中東部ジャワの言葉とはアクセントが随分異なっていました。外語では、野球部へも入りました。

「スパイになれ」

外語も含めて、高等専門学校は殆ど3年制でした。3年の夏休みが終わったころ、突如「2学期から外国郵便の検閲をやれ、勤務は神戸中央郵便局」と命令されました。東京外語が名古屋以東、大阪外語が京都以西を分担。英語、蘭語、馬來語を受け持ちましたが、コレポンや私信を開封し Opened by Censorship の印鑑を押しました。奥さんや恋人からの私信には、ルージュで封をした封書も多かったけれど、ルージュの上から検印を押すような“野暮”はしませんでした。

太平洋戦争が激化、徴兵延期はなくなりました。17年2月、山口歩兵留守隊(広島5師団、本隊はマレー作戦中)に入営。初年兵教育ののち、保定(北京の100km南)予備士官学校で7ヵ月の将校教育を受けました。

卒業も迫ったころ、中隊長に「貴様、オランダ語を専攻したな。卒業したら、中野学校(スパイ養成学校)へ行け」と言われました。



Takeshi Fujiwara

THE MAINICHI NEWSPAPER
JAKARTA

WISMA WARTA
ROOM 513
JAKARTA

ジャカルタ時代の名刺

とっさに「航空を志願します」と答えたところ、中隊長はにやっと笑って「航空へ行け、この話はなかったことにする」と解放してくれました。近眼の私が航空隊に不向きだと分かっている、助けてくれたと今も思っています。同期で山口高商出身の秦君はレイテ島で陸軍特攻隊員として、敵艦に突っ込み戦死。馬來語部で机を並べていた松原重幹君（故人）は中野学校へ行ったが、戦後も陸上自衛隊に定年まで勤めていました。

昭和20年、アラフラ海を挟んで、オーストラリアと対峙するモルッカ諸島のひとつ、ケイ島で終戦。ケガや病気もありませんでした。突然「外語出身だから占領軍（豪州）との間の連絡将校をやれ」と命じられて、5師団司令部付となり、イギリスの軍艦に降伏命令を取りに行かされました。

文書の書き出しに「天皇が降伏したから、日本軍は天皇の命令によって、連合軍の指示通り武装解除せねばならない」とあり、「うまいことを言うなあ」と思っていました。



駐在当時の中国人街 独立記念塔



生しました。この時も「外語出身の藤原に取材させろ」ということになり、41年（1966年）から5年近く、ジ

ャカルタ特派員を命じられ、スカルノ - スハルトの政権交代劇を見てきました。

「インドネシアの国教はイスラム」と欧米系の記者たちは割り切るが、単純ではありません。

イスラムに熱心なのはスマトラ、特にアチェなど北部が狂信的。中部、東部ジャワはイスラムよりも、原始信仰・ドゥクーン（一種の占い）への信仰が強く、スカルノがスハルトに政権を渡したのも、両首脳のドゥクーンが

バリ島の大統領官邸会談した結果で、満月の夜でした。

現在ジャカルタの国際空港の名称は「スカルノ・ハッタ空港」です。西歐的に言うと「共産党と手を握ったスカルノをいまだに持ち上げるのはおかしい」となるで

しょう。でも、これが現実なのです。

国際関係論を講義

新聞記者在任中、マレーシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、チェコなど、戦争と紛争地域ばかり取材しました。

昭和56年定年退職。その後80歳まで四天王寺国際仏教大学で教授として、国際関係論を講義。採用に当たっては、書いた新聞記事がそのまま、論文とみなされるので、得をしました。

アメリカがベトナムで失敗したところから、湾岸戦争 - テロ続発 - イラク戦争勃発など激しく世界が動きました。講義の教材には新聞記事も活用。このため、乏しい懐を絞って「毎日」「朝日」「日経」と3紙を購読し、こまかく読んでいました。

現在85歳。息子の世話で静かに余生を送っています。



④スカルノ大統領に迎えられる藤原氏
⑤スハルト大統領（第2代）と八木大使



しかし、復員後、米女性民俗学者・ベネディクトの「菊と刀」を読んで「日本を降伏させるには、天皇制を上

手く利用することにある」とアメリカは分析していたことが飲み込みました。

新聞記者として

復員して京大文学部に入り、卒業後、毎日新聞の記者に。昭和40年9月、インドネシアで「共産党の反乱」(?)と言われた「9・30事件」が発

爪跡

屋根に乗り上げたままの船(Ⓔ)と
階下が空洞の状態になった民家



2004年12月に起きたスマトラ沖地震・大津波からやがて3年を迎える。震源地に近いアチェの支援に取り組んでいる大阪外大の「学生の会」(OGASA)第4回訪問(07年2月25日~3月5日)から、写真と学生らの感想を -。

アチェ支援 OGASA のレポート



今回の訪問では初めて「手紙プロジェクト」を実施した。あらかじめ箕面市立豊川南小学校に学生が津波についての出張授業を行い、5年生児童にアチェの子供向けの手紙を依頼し、インドネシア語に翻訳。日本を紹介する写真なども持参した。

アチェのカジュ小学校、クタパシ小学校、第20小学校、アルーナガ地区の子供など4カ所に手紙を届け、日本の様子をビデオで紹介。その場で返事を書いてもらった。内容は、津波のことだけでなく、好きな食べ物や将来の夢、漫画やイラストなどさまざま。新たな「つながり」で、励ましあう心を育み“異文化交流”の芽をつくる狙い。4カ所には、募金で購入した文具や楽器、遊具などを贈った。



9日間の日程で被災地を見学、子供たちとの交流のほか、現地で支援に当たっているNGO団体や国際組織、大学、マスメディア関係を訪問した。(訪問は学生と松野明久教授の計7人。第

アチェのモスク



5回訪問は8月末に)

【感想】

岡本龍一(OGASA代表)
2回生「アチェの子供の多くは津波や紛争を体験している。親を失い、寂しさを感じ、トラウマに苦しむ子もいる。それを和らげる

ために、アチェと日本の子供を結ぶ手紙プロジェクトを始めた。成果が出るには長い時間がかかるだろう。これからも活動を持続させていきたい」



あやとり

長谷川沙織(2回生)「被災地を見た。

ほんの一部にすぎないけれども、その光景は深く焼きついている。肉親や友人を亡くした人が、笑顔で私たちを迎えてくれた。彼らから逆にたくさんのエネルギーをもらった気もする。行ってよかった！」

小森菜央(2回生)「NGO団体の中には津波の被害にあった人も多い。それにもか

かわらず、微笑みながら懸命に支援に取り組んでいる。支援を受ける人も自然に笑顔になっている。OGASAの活動に、はっきりとした自信を持つことができた。頑張ろう」

新屋佳菜(2回生)「まちの復興は少しずつ進んでいる。しかし、一歩郊外に出ると、津波の爪跡はたくさん残っている。津波の凄まじさを実感した。私たちと顔を合わせた人々は笑顔を向けてくれた。小学校でも子供たちのかわいい笑顔。すごく強さを感じた」

竹田孝紀(3回生)「インドネシアは3回目だったが、アチェは初めて。津波被災地・紛争被害地の復興格差が広がっている。海岸地域や郊外は遅れている。どう調整されていくか。より住民の視点に立った復興をアチェの人々は求めている。今後の動向を注視したい」



キャンパス便り

専攻語インドネシア語 講師 原 真由子
(外国語学部)

第1期を終えて

今年度から1・2年生の専攻語実習を除く全ての授業科目にセメスター制(学期制)が導入され、第1期と第2期の学期ごとに単位をとることができるようになりました。学生たちは今、期末試験やレポート作成に追われているところです。



4月には大阪外国語大学として最後の新生を迎えました。インドネシア語専攻の1年生は23人で、近年珍しくそのうち10人が男子です。ここ数年、男子学生は数においても活発さにおいても女子学生に圧倒され気味の感がありましたが、今年は少しくラスの雰囲気が変わるような気がします。

6月30日(土)に毎年恒例の夏祭りが開催されましたが、1年生は模擬店を出店したり、また民族衣装パフォーマンスに参加したりするなど、彼らにとって初めての学生イベントを楽しんだようです。模擬店は、暑い中、ピサン・ゴレンを揚げ、それにアイスクリームを添えたデザートを売りました。作業は手際良く、お客さんへの応対もこやかで、味もまあまあでした。

民族衣装パフォーマンスでは、5人の学生がアチェの踊りを披露しました。踊りの振りは、踊りの衣装と一

語劇

今年度の間谷祭は10月27日(土)・28日(日)の2日間です。2年生はインドネシア語劇『ジャカ・タルブと7人の天女 Jaka Tarub dan Tujuh Bidadari』を上演する予定です。脚本は、昨年度『戦争 Perang』を書いて頂いたインドネシア大学のユスフ先生にまたお願いしました。人間の本性を問うた哲学的な内容の『戦争』とは大きく違い、『ジャカ・タルブと7人の天女』は羽衣伝説をもとにしたコメディタッチのストーリーです。



バリ島でのフィールド・ワーク(④前が筆者)

緒に現地から送ってもらったV(ビデオ)CDを参考にし、彼ら自身でサマンとサウダティという2種類の踊りから創作したそうです。手本はVCDのみで、踊りの練習をつけてくれる人はいなかったわけですが、知らぬ間に練習を重ね、大変息の合った堂々とした演技を見せてくれました。

残念ながら賞は逃しましたが、テンポの速い音楽に乗った機敏な上半身の動きに、観客の学生や一般の方々から驚嘆の声と拍手がやみませんでした。この夏祭りを通して、クラス皆が協力し合い、交流を深めてくれたことを嬉しく思います。



すでに配役と役割分担は決まり、夏休み返上で練習や大道具・小道具の準備に励んできたようです。

語劇の日程は決まり次第、お知らせしたいと思っています。学生たちにとって、インドネシア語専攻のために特別に書いてもらった本格的な脚本で語劇を上演するという事は非常に貴重な体験です。このような機会が得られるのも、南十字星会皆様の温かいご支援のおかげです。本当にありがとうございます。

オープンキャンパス

7月28日(土)にオープンキャンパスが実施されました。今回のオープンキャンパスは、新生大阪大学の外国語学部を受験する予定の高校生、つまり大阪大学外国語学部の第1期生候補者を対象にしています。外国語学部全体の紹介、各専攻語の紹介、キャンパスツアーなどがありました。

我々インドネシア語専攻は、手作りのパンフレットを作成し、スライドやCD、本、楽器などを用いながらインドネシアの言語・社会・文化の簡単な概説やインドネシア語専攻の紹介を行いました。また、1年生にも踊りのパフォーマンスをしてもらいました。最後に、



インドネシア語ネイティブのサフィトリ・エリアス先生によるミニレッスンでは、

参加者1人ひとりに単語を発音してもらいました。インドネシア語専攻は、1回約45分のセッションを計3回行い、全部で35人ほどの来場者がありました。多

統合目前

とうとう10月1日に大阪外国語大学は、大阪大学と統合し、大阪大学外国語学部として再出発することになりました。これまで外国語学部は、国際文化学科と地域文化学科の2学科ありましたが、新外国語学部では外国語学科1学科のみとなり、日本語を含めて25言語の専攻から構成されます。そして夜間主コースは廃止となります。インドネシア語を専攻する学生は大阪大学外国語学部外国語学科インドネシア語専攻に在籍することになります。

来年度からインドネシア語専攻の募集定員は、前期日程入試7人、後期日程入試3人の計10人です。来年度以降の新生は、新しい授業カリキュラムが適用されます。そのため1年生の1年間は豊中キャンパスで阪大の共通教育(いわゆる教養)を受けながら専攻語実習を受け、2年生以降は箕面キャンパスで専攻を中心とする授業を受けることとなります。現在在籍中の学生は、卒業までこれまで通り現行のカリキュラムが適用され、箕面キャンパスで受講するので、基本的に授業科目について変化はないのですが、統合による



くの参加者にとって、ワヤンの人形、仮面、アングロン、現地のスライド、インドネシア語など、初めて見たり聞いたり触れたりする体験はとても新鮮なようでした。

プロフィール

はら・まゆこ=1995年東京外国語大学卒業。2004年同大学院博士後期課程単位取得退学。修士・言語学。(92年から94年にかけてパリのウダヤナ大学へ留学)。05年4月大阪外国語大学外国語学部アジア講座講師。07年10月から世界言語研究センター所属。

様々な
変更と

当然無関係ではなく、学生生活に大きな影響がありません。例えば、来年度以降、箕面キャンパスでも他のキャンパス(吹田、豊中)に合わせて授業時間スケジュールが変更になり、1時限目は9時10分開始であったのが8時50分開始になる予定です。

また、インドネシア語専攻の授業を担当する教員は、今まで通りサフィトリ先生を含め4人ですが、所属先はそれぞれ異なる大学院あるいは大学院レベルの研究所が変わります。すなわち、松野先生は国際公共政策研究科、福岡先生は人間科学研究科、サフィトリ先生と原は世界言語研究センターに所属します。

所属先が異なる4人のスタッフが、外国語学部のインドネシア語専攻の授業運営を維持していくには難しい部分もありますが、これまで以上に学生のインドネシアへの関心を高め、彼らの知的好奇心に応えられるように頑張っていきたいと思っています。変わらぬご支援をよろしくお願い致します。

寄稿

Apa & siapa

遠くて近き高槻学舎

中村 徹 (58卒 大6)

私と高槻との付き合いは昭和29年(1954年)4月、外大入学で始まりました。遠い昔のことです。当時、上本町八丁目(上八)が本校でしたが手狭だったため3、4年生だけが使用し、1、2年生は高槻学舎でした。場所は阪急高槻市駅から南へ徒歩約10分、明治42年(1909年)から昭和20年(1945年)まで足掛け37年間、旧陸軍工兵隊が駐屯していた跡でした。

大学とは名ばかり、校舎は古びた木造2階建てで、田舎の小学校か中学校といった佇まいでした。最初の授業に出て来られたのがクダと綽名をされた長いお顔の内藤春三教授で厳しい中にも慈愛に満ちた先生でした。何故なら私のような劣等生でも卒業させてくださったのですから…。校庭にはいつもナジール先生の大きなアメ車が1台ドーンと鎮座していたことを何故かはっきり憶えています。

高槻学舎は兵舎跡だけに校庭が比較的広く、勉強も然ることながら大いに運動にも汗を流し、充実した教養部の学生生活を送れたような気がします。

高槻は山側のJR(旧国鉄)高槻駅と200mほど南側の阪急の高槻市駅を中心に広がった町で、現在も町並みは大きく変わっていません。当時、外大生がよく通った飲み屋は国鉄と阪急駅の中ほどにあり、悪友が待ち構えるマージャン屋は阪急駅から高槻学舎までの通学路沿いで、誘惑に弱い私はよく喜んで引きずり込まれたものです。

私自身は大学であまり勉強した記憶がなく、家計を助けるためのアルバイトと遊びに明け暮れ、年間6,000円の授業料も毎年3月末に会計課に飛び込みで持ち込むといった有様でした。従って、インドネシア語も商社でジャカルタ駐在してから泥縄式に勉強したような次第ですが、必要に応じて難しい言い回しも何となく出てきて辛うじて外大出身者としての面目も保てたように思います。



旧工兵隊の門は学舎の正門だった

高槻学舎での思い出といえば、まずオリンピック祭と茨木までの学内駅伝でしょうか。共に語科対抗で、オリンピック祭ではそれぞれ民族衣装をつけての応援はそれだけでも楽しいものでした。その夜は遅くまで大騒ぎをし、拳句の果ては行きつけの飲み屋さんか友人の下宿先で轟沈です。

駅伝は高槻学舎から国道171号を経由して茨木警察署を往復するものでした。私もインドネシア語科代表の1人として走りましたが、平素の酒とふしだらな生活が災いしたのか、私の区間で数人に追い抜かれ優勝を逸しました。国道171号は昭和45年の万博にあわせて片側2車線になったと聞きましたが、当時はまだ片側

1車線の田園風景豊かなのんびりした道路でした。

こんな環境の下で半ば旧制高校時代を彷彿とさせる教養部時代を送れたことは後々の人生にとって、学問のみならず豊かな人間性が育まれたのではないかと勉強をしなかった者特有の勝手な理屈を付け

ている次第です。

昭和45年(1970年)から何故か旧高槻学舎の近くに住むようになり、最近では高槻の歴史にも多少詳しくなりました。高槻学舎があった場所は、戦国時代から続いた高槻城の一部で現在は城跡公園として市民の憩いの場になっています。

因みに城は明治7年に破却され、淀川の洪水に悩まされていた高槻市が治水対策の一環として、旧陸軍工兵隊を堺市と競争の末誘致に成功し、駐屯地にしたとのこと。城の石垣石は旧国鉄の京阪間東海道線の鉄道工事に使われ、鉄道普及に貢献したと聞いています。同窓生の皆さんも、いちど高槻にお越しになり高槻学舎を偲ばれるのも一興かと思えます。



④オリンピック祭のひとコマ(前列左側)
⑤内藤春三教授の姿
⑥高槻城跡の石碑
前、学生の頃と同じ腕組みの筆者

寄稿

Apa & siapa

外大で学んでよかった

小杉 功 ('64卒 大12)

南十字星会の皆様、はじめまして。毎回この会報をなつかしく拝読させていただいています。私自身が執筆の機会をいただけるとは思っていませんでしたが、同期の編集長のご配慮により今回、実現した次第です。

私は大学進学にあたり、将来は世界の舞台で仕事をしたいとの強い思いがありました。大阪外大を第1志望校として、学科は薦めてくれる方もあってインドネシア語を選びました。ナジール先生に大変かわいがっていただき、楽しく勉強を続けられました。そして3回生の時に

幸運にもインドネシア招待を受けました。ホームステイ先で家族の一員として受け入れられ、人々の豊かな人間性に触れることができたのです。これらの経験は、思い出というだけでなく、社会人となって駐在した時にも大いに役立ったように思います。

縁あってトヨタ自動車に勤めました。外地勤務もレバノン、インドネシア、フランス、ベルギー、アラビアなどを転々。インドネシアでは発展途上国の苦悩を、また欧州では個人々々が真の大人として社会活動をしている実態を目の当たりにし、大変勉強になりました。

2006年6月に42年間の職業人としてのキャリアに一応、終止符を打ちました。大阪外大インドネシア語学科を卒業して歩んだ道のりを振り返ると「十分満足できるもの」であり、さらにそれは外大を志望しそこで得たものが土台になっていたことを考えると「本当に良かったな」とつくづく感じるのです。

少し具体的に申しますと、日本あるいは日本人として世界の舞台で認められ成果をあげるのに、まず必要なのはどの国の人々とも心底コミュニケーションを図ること



ニューヨークのメトロポリタン歌劇場前で
07年5月

です。双方の理解と信頼のもとに、共に行動することによって可能となるのです。

世界から信頼される日本を築いてゆく人材の輩出に、外大の果たす使命は大きく、社会からも期待されてきました。校歌に“東の空に明けの明星ひとつ、これぞ大阪外国語学校。起てよ、叫べ、輝かせ”とあります。実際、各分野での国際社会における日本のポジション獲得に大

いに貢献してきたと自負できるでしょう。

しかし、日本が今後直面せねばならない世界情勢はさらに複雑・困難化することが予想されます。それらを解決するためには政治手法や経済手法以前の課題として、人間同士が同じ価値観を共有できる力を持たねばなりません。厳しい言い方ながら、現状の日本においてこの力はまだまだ不足していることを思うと、大阪大学に統合後の新学部の存在価値は、日本にとってますます重要であるとの自負を持つべきでしょう。

後輩の皆さんの奮起と学長をはじめ関係者のご奮闘・ご活躍を切に祈ります。



フランス従業員家族宅を訪問=06年10月

私は仕事を通じて幸いなことにほぼ全世界とお付き合いをすることができました。その中でインドネシアでは、多くの卒業生の方々のように長期にわたるものではありません。それでも1979年秋から85年初まで約5年半勤めました。困難な経済情勢の中、インドネシアの方々と共に苦楽を分かちることができたことは、私の心の財産となりました。

会社のOB会の中でもジャカルタ会は隆盛を極める会の1つです。これもインドネシアという国、人々との人間性に富んだお付き合いが根底にあるからだと思います。

インドネシアもいよいよ新しい時代へ進みそうです。心から飛躍を祈りたいものです。

じゃかるた発



スラバヤの魅力

小泉 真里 ('02卒 大50)

インドネシア第2の都市、スラバヤ。名前は知っているけど、実際に行ったことはないという方も多いのではないのでしょうか。単純に東京 - 大阪をイメージしていた私は、以前に何度か訪れたジャカルタの都市ぶりを思い浮かべ期待していたものですから、初めてスラバヤの中心街を案内された際には「え？これだけ？」と、そのギャップにいい意味で裏切られたのを今でもよく覚えています。以降、このごちんまりとした街での生活にすっかり馴染んだ私は、4年半を過ごすに至りました。

スラバヤは観光資源に乏しい街ですが、マジパヒトホテルや、ダルモ病院などオランダ時代からの古い建物が今でも市内に残る歴史のある街です。かつて、スラバヤビジネス街の中心であった Kembang Jepung 通り。ここは夜になると KYA KYA という歩行者天国として開放され、中華街ながら多くの屋台が軒を連ねます。以前は老朽化が進み、治安が悪いと敬遠されて

いたこの通りも、数年前にオープンした中国語で “Jalan-Jalan” を意味するこの歩行者天国により、今では多くの人々が訪れるちょっとした観光スポットに様変わりしています。「豚肉のサテをつまみに氷入りのビールを傾ける」という風景を、道端で見かけることができるでしょう。

ローカルムードを味わえる買い物スポットとしては、“Pasar Atom” という、食品・衣料品からバツタ物まであらゆる物が安い市場風モールがお勧めです。迷路のような建物に足を踏み入れると、そこでは大阪のおばちゃんも顔負けのスラバヤ版おばちゃんパワーが炸裂しており、もうすぐ50代に手が届こうというおばち



スラバヤの街（住んでいたアパートから）

ゃんが、娘顔負けの派手な服を着て闊歩し、何をかうにもとことん値切るといふ、氣迫に満ちた場面を目撃できるでしょう。混雑していますが治安は良いので、綺麗なショッピングモールに飽きたらぜひ一度足を運んでみてください。そして買い物に疲れたら、たばこ

メーカーのサンプルナが経営する博物館を訪れると良いでしょう。たばこを手作業で巻く工程を見学できるほか、売店やレトロ調のカフェもあり、ひと休みには最適です。

スラバヤの言語はジャワ語が主流ですが、ジョグジャカルタなどの宮廷ジャワ語 (Bahasa Jawa Halus) に対し、SUROBOYOAN と呼ばれる大衆的な言語 (Bahasa Jawa Kasar) が広く普及しています。ジャカルタではインドネシア語が一般的で、中国系住民なら中国語を話す住民も多いと思いますが、スラバヤではインドネシア系も中国系も皆ジャワ語で話す場合が多いです。この SUROBOYOAN の単語はインドネシア語とは異なり、また宮廷ジャワ語とも異なるため、



スラバヤ郊外のサファリパークで

初めてスラバヤに来たときには全く理解できず苦労しました。

当時、私は会社で Ms. Mari と呼ばれていたのですが、SUROBOYOAN で「もう済みました」の意を表す “wis mari” という表現が解らなかったために、そのフレーズを聞いたときに自分が呼ばれていると勘違いをして振り向いてしまい、笑われたことなどが印象的です。

07年春にスラバヤを離れ、現在はジャカルタの日系企業に勤務する身ですが、街でスラバヤ料理を見かければつい試してしまうなど、スラバヤ好きは今でも変わりません。スラバヤにお越しの機会があればぜひ案内させていただきますので、お気軽にご連絡ください。

寄稿

Apa & siapa

アジアと付き合い 40 年

朝倉 俊雄 ('67卒 大15)

福井県の片田舎に育った私には、中学時代に米国のペンパルと文通したこと以外に外国との縁は皆無でした。外国への憧れは、戦前満州へ出稼ぎに行った親父の血を引いたのでしょう。今思うと、漠としたアジアへの興味から 1963 年に大阪外大インドネシア語科に入学したことが、爾来今日まで続くアジアとの付き合いの始まりでした。

大学の 4 年間はバハサと英会話に浸かる毎日。空いた時間は学費稼ぎのための家庭教師とアルバイトの連続で、アジアへの旅行は夢のまた夢でした。

卒業して入った職場がジェットロ(日本貿易振興機構)。主な仕事は日本企業の海外事業や途上国の対日輸出促進を支援することです。2005 年 3 月末に退職するまで 38 年間に、ジャカルタ、クアラルンプール、ハノイ、マニラで計 13 年半勤務しました。

印象深いのは 30 代に初めて経験したジャカルタ勤務です。親子 3 人、住み込みのメイドや子守、運転手との生活を通じ、すっかりインドネシア鼻根になりました。友人と車を連ねて中部ジャワを 1 周、農村でジャワ語がわからず往生しながらも、泥流のソロ河を前に「ブンガワンソロ」を絶唱(叫)したことが懐かしく思い出されます。



勤務先の貿易研修センターで



30 年前のジャカルタ時代。自宅接待時には、サテ売りもよく呼んだ

2 度目のジャカルタ勤務は 05 年 5 月から 1 年余、JICA 専門家としてインドネシア地方貿易研修振興センタープロジェクトに従事しました。輸出振興庁(NAFED)や州政府と協力して、スラバヤ、メダン、マカッサル、バンジャルマシで輸出業者向けに貿易研修や輸出促進のための地方拠点を立ち上げましたが、改めて東西 5,000 キロ、国内で 3 時間の時差を持つ広い国土や多様な文化を実感しました。

今年初めから(財)貿易研修センター(<http://www.iist.or.jp>)に勤務、以前の(財)アジアクラブを承継して新設されたアジア部で、引き続きアジアとの交流をお手伝いしています。アセアン後発組の CLMV 各国や中央アジア諸国など、支援対象地域が新たな広がりを見せており、年々お付き合いする国々が増えて興味は尽きません。

どこにいても同窓の先輩後輩にお会いするのは楽しいもの。90 年代半ばにハノイで東西外語会を立ち上げ、マニラでも咲耶会に参加しました。

我が南十字星会では、ジャカルタ支部のお世話になったこともあり、今年から関東支部のお手伝い(支部長)をしています。7 月 14 日の 07 年度懇親会には、1944 年卒の大先輩から 2003 年卒の若手まで総勢 35 人が集まり、大いに盛り上がりました。10 月の阪大との統合で外大の名前がなくなるのは寂しいですが、今後とも南十字星会の活動を発展させていきたいものです。



07 年度の関東支部懇親会。解散前に出席者一同で記念写真

寄稿

Apa & siapa

嗚呼 気がつけば インドネシア

岩佐 晶子 ('03卒 大51)



皆様こんにちは、2002年度地域文化学科インドネシア語専攻卒業の岩佐晶子と申します。

この度、縁あって会報に投稿させていただく機会をいただき、ありがとうございました。

まずはじめに、簡単に自己紹介をさせていただくと、外大を卒業しまして、上智大学大学院修士課程に進学いたしました。学部時代にジャカルタに留学をしておりましたので、せっかく覚えたインドネシア語を使って何かやりたいなあ、という程度の動機でノコノコと上京。院生という今から思えばお気楽な身分で、2年間延長された学生生活を東京にて謳歌いたしました。

当初は漠然と、修士課程に進んだのだから、博士課程にもいくだろう、なんてことを考えておりましたが、自らの実力と、世の流れに身を任せていると、気がつけば東京にて会社勤めをしている自分がおりました。

勤め先はソフトバンクBBという会社で、入社してからこれまでの業務内容は、見事にインドネシアとの関係を微塵も感じる事のない、国内代理店営業として、日々細々と暮らしております。

皆様のその1分の携帯通話で、私の明日が支えられております。ありがとうございます。

さて、学生時代にそこまでしてインドネシアにどっぷり浸かっていた私が、今やインドネシアを感じる事のない日常で、日々「仕切り」「納期」「商流」「与信」「請

求」「回収」という言葉に追い回されながら商売のイロハを学び

つつある、ある意味 seorang pedagang ですが、よく考えてみると、確実に学生時代の経験が、今の仕事に活かされている瞬間がたくさんあるのに気づきます。日々の営業活動が、インドネシアにおける旅行やフィールドワークに重なるのです。

地図を見ながら、初めての訪問先へ伺い、覚えてたのIT用語を使って話をしてみるけれど、相手が何を話しているかがわからず、聞き返す。相手が私の表情を見て、わかっていないと判断すると、さらに砕いてご教示くださる…。それは、旅先で出会った人と話して言葉を一つひとつ覚え、覚えた言葉と足で歩き回ってフィールドワークをしたインドネシアでの経験とそっくりです。

学生時代にそんな経験をしていたからこそ、今や臆することなくお客さんの胸の中へ飛び込んでゆけます。そんな私が、果たして社会の役に立っているかどうかは別として、今の私は、間違いなくインドネシア語を学んだ学生時代があったからこそあるのだと信じております。

この先、どんな形でインドネシアとつながっていくかはわかりませんが、そうやって、私はこっそりと日々インドネシアを感じながら、大都会の荒波にもまれて修行をしております。いつか、インドネシアにつながる日を夢見ながら…。

山 バリの風景 海

ウブドの山で

サヌールビーチで=07,8,14



写真: 大51
芝田亜希



消息・ひとこと

三宅 勇 (専 19) =兵庫県尼崎市

私の脳梗塞の方も九死に一生を得て、現在老人介護センターでリハビリ中です。

東郷芳温 (専 21) =東京都千代田区

「生涯現役」。まだ数年は BUNGAWAN SOLO を歌い続けたいと思っています。蒙古語の故司馬遼太郎さんと同期。語科を超えて実施していた“街道を歩く旅行会”も今は思い出です。(東郷さんからは協賛金 10万円の振り込みをいただきました)

原 勝利 (専 26) =千葉県佐倉市

今の仕事については会社の Home page を見てください。http://www.keibai-sonpo.com

小原義男 (大 1) =名古屋市中村区

インドネシア語の司法通訳人の仕事は、相変わらず愛知県警、検察庁、裁判所からお呼びがかかり、出かけています。尺八も演奏会と後輩の指導。老骨に鞭うって毎日を過ごしています。

磯浦美恵子 (大 6) =大阪府吹田市

バダンの Bung Hatta、マカッサルの Hasanuddin それぞれの大学から招待を受け、講演・講義に。卒業して 50 年、いい記念になると思います。

岩井俊之 (大 9) =大阪府高槻市

通算 20 年のインドネシア勤務を終えて 1999 年に帰国。その体験記を自費出版しました。『南国インドネシアに生きる』というタイトルで、179 頁。これから滞在しようという人や興味のある方にインドネシアを紹介する意味で書きました。

石川恵二 (大 10) =横浜市緑区

10 月以降も南十字星が輝き続けるよう。

小原一浩 (大 11) =大阪狭山市

07 年 3 月に 3 冊目の本『男の遺言状』を上梓しました。文芸社ビジュアルアート、定価 840 円。グーグルやヤフーで検索し、IT 書店で購入していただければ幸いです。

『千の風』 インドネシア語版

『千の風になって』のインドネシア語版です。在日インドネシア人に修正してもらいました。元の歌詞は作者不詳の英語の詩。新井満氏が日本語訳で発表、秋川雅史氏のテノールで大ヒットしました。

[私のお墓の前で泣かないでください/そこにはいません、眠ってなんかいません/千の風に 千の風になって/あの大きな空を 吹きわたっています...] という、あの歌詞です。 渡辺重視 (大 12)

Menjadi Ribuan Angin

Wahai kasih, Janganlah kau menangis di depan nisan pusaraku

Karena ku tak ada di sana dan juga tak sedang terlelap

Namun ku menjelma menjadi ribuan angin

Yang terbang di langit luas, s'lalu hanyut tersapu angin

Musim gugur ku menjadi cahaya yg menyinari tetumbuhan

Di musim dingin menjadi salju yg berkilau bagaikan intan

Pagi jadi burung yg s'lalu membangunkanmu

Di kala malam menjadi bintang yg tak lelah melindungimu

Wahai kasih, Janganlah kau menangis di depan nisan pusaraku

Karena ku tak ada di sana juga tiada di alam baka

Namun ku menjelma menjadi ribuan angin

Yang terbang di langit luas, s'lalu hanyut tersapu angin

坂田文彦 (大 26) =千葉県佐倉市

オーストラリアに 2 度目の駐在をしています。大阪外大の名前が消えるのは大変残念ですが、阪大と統合して更なる発展を期待します。

正田佐和子 (大 37) =堺市堺区

統合はさびしい限りです。松野教授はじめ現役学生の活躍に感謝。“インドネシアの愛”が受け継がれますよう。南十字星会のご発展を祈ります。

竹前望美 (大 42) =新潟県新発田市

皆様のご活躍を楽しく読んでいます。4 号では、入社した時に「西田さんの後輩だね」と、親会社にいらした西田達雄氏のお名前を初めて聞いたことを思い出しました。

沖中弘和 (大 43) =奈良県宇陀市

フットサルを始めました。ズボンがいくらか細身に...

おくやみ申し上げます

中嶋謙三 (専 13) =鳥取市 07 年 2 月 13 日死去。



ジャカルタ支部 8 月 21 日、スナヤンプラザにある

「Pacific Diner」で支部の幹事会を開催しました。そのときの写真です。安倍首相・経団連一行が 20 日にジャカルタを訪れて新聞各紙も大きく報道。無事、次の訪問地インドへ向かわれた直後だったので、在住の関係者もホッとしたところでした。 (内原正司・支部長)

投稿のお願い

「南十字星」の第 6 号は 08 年 4 月に刊行の予定です。投稿をお待ちしています。テーマ自由。原稿の長さは原則 1200 字程度です。メールなら A4 で 1 枚少々。カラー写真も添付してください。

あて先は、岩谷英志 (rocky3@wombat.zaq.ne.jp)

住所 〒563-0029 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

郵送でも結構です。

(Tel 072-753-1693)